



TOGA-COARE Workshop と TOGA-SSG9 の報告*

住 明 正**

1. はじめに

7月16日から20日にかけてホノルルで開かれた TOGA-Conference に時期を合わせて、7月12日に、米国の COARE-SWG (Scientific Working Group) の会議、7月13日に、International TOGA-COARE Workshop が、ハワイ大学に隣接する東西文化センターの Imin Conference Center で、そして TOGA-SSG9 が、Conference のあとハワイ島のコナで開かれた。ちなみに最近では、このような国際会議に合わせて、様々な business meeting を持つことが多く、今回も全部で9つの会議がもたれたとのことであった。このようになると滞在期間も長くなり、「もう結構」という感じになって来る。

さて、この Imin Conference Center は、日系移民100周年を記念して、日系人の寄付で、その当時は、Jefferson Hall と呼ばれていた、東西センターのカフェテリアやロビーがあった建物を買い取り改修したものである。目の前に日本庭園が広がり、パンフレットには「なかなか良い」と書いてあったが、昔を知るものとしては、「学生が入れなくなり、現状改悪だ。本当に日本人はロクなことをしない」と思う次第である。

2. TOGA-COARE Workshop

この TOGA-COARE Workshop の中心課題は、気象海洋の観測計画の議論と、野外集中観測 (Intensive Observing Period) の時期の決定であった。何故に、今ごろ IOP の時期が問題になるかという点、主として NCAR の飛行機にのせる Doppler レーダーが間に合わないこと、および、船に乗せる ISS (Integrated

Sounding System) の開発が間に合わないことのようにある。

この問題を提案した R. Lukas のスライドには、延期を支持する要因として、①新しい測器の開発に時間が必要、②もっと、いろんな国が参加し得る、例えば、韓国やインドネシア、をあげており、延期の不可能な理由として、①日本が既に 92/93 で動いていること、②NOAA の P-3 が1993年には参加出来ないこと、などをあげていた。

この変更の提案に対しては、日本、オーストラリア、フランスなどが、「今迄 1992/93 で、国際的に参加を要請しており、各国もそれで動いている時、急に米国の都合で変えられるのは問題がある」との反対意見をだした。

最後に、Panel の委員だけで採決を行い、結局予定通り 92/93 に決まったが、後で Lukas などに聞くと、もともと 92/93 で行おうと思っていたが、反対勢力を納得させるために、いわば「ガス抜き」をしたのだと聞いていた。この時、戦後のほとんどの国際プロジェクトを指導してきた Kuettner 翁 (80 才らしい?) が、「先が分からないときは、一年延ばしたからといって、状況が好転する保証がない。一度延ばしたら、必ずまた延ばそうという話がある」と言っていたのは、印象的であった。その他、NOAA の予算が議会で削られるかもしれないから、待った方が良いとか、どうか、消耗な話をしていった。

その他は、実行計画の打ち合わせをする会議を11月の末に、サンフランシスコで開くことを決めて散会した。

この時で印象に残ったことは、アメリカの計画の立て方は、お金のことを考えないで、まず、理論的な観測網を考え (日本人から見ると、少し子供っぽく思えてくる)、それから、それを実現するために努力する、とい

* Report on TOGA-COARE Workshop and TOGA-SSG9

** Akimasa Sumi, 東京大学理学部地球物理学教室.

う発想法である。これは、突如一年で NOAA の研究費が5倍になるような国だから可能なことで、日本のように考える前から、使える資源と金が見えてしまう国では、とてもついて行けない時間の無駄という気がどうしでもしてしまう。

唯、問題点は、現在の情勢では、米国の占める位置がすごく大きく、米国の観測計画が結局国際的な観測計画にならざるを得ないということである。そのために、各国は、米国の状況にふりまわされざるを得ず、これには、フランス、オーストリア、日本、インドなどが、陰で文句を言っていた。

さらに、アメリカのグループが、US の国内会議と国際会議の区別をせず、国際会議でも、勝手に国内会議の如くやりまくっているのは、多少問題がある。「日本人のような非英語国の人間もいるのだ」と言ったら、P. Webster が、「自分もそうだ」と言い返してきた。

それと、努力しているつもりではあるが、多忙の故に、やはり、コミュニケーション・ギャップがあり、状況の把握などにどうしても一歩遅れるところがある。今後、国際的な場で影響力を強めようとしたら、海外の状況を眺め、情報を収集する様な面にも、人をさいておくことが必要であろう。

3. TOGA-SSG 9

今回の会議の主要なテーマは、1990-94 をどうするか、そして post-TOGA をどうするか、ということであった。

TOGA の現状と成果については、Morel が上手にまとめていて、TOGA の成果とは、「気候の本質たる結合系に対し、予測・検証出来るシステムを整備した、あるいは、整備しようとしていること」である。その結果、1990-94 の TOGA の活動は、

- (1) ENSO の予測—TOGA-NEG の担当、
- (2) モンスーンの予測—TOGA-MONEG の担当
- (3) COARE—将来の学問への投資

の3本の柱に集約される。post-TOGA に関しては、現

在結合系を取り扱っているのが TOGA だけであり、post-TOGA では、GEWEX が気象の、WOCE が海洋のプロジェクトと、分離主義的な傾向が見られるので、TOGA で始められた結合系の研究に対する方向を更に発展させるような新しいプロジェクトを1995年以降にも展開することで、合意がなされた。

そして、TOGA-SSG の役目は大概終了し、今後はさきに述べた、NEG、MONEG、COARE などの各 Panel での議論が活動の中心となり、SSG は、全体の調整をとる場で良いのではないかと、ということになり、SSG の改組が承認された。具体的には、NEG、MONEG、COARE から二人ずつ、それに、海洋の観測家、およびその他3~4名で、全体で10名程度、ということのようである。この場で、P. Webster が議長から降り、次は D. Anderson が引き継ぐ予定である。Gill から始まった TOGA が、丁度タイミング良くもとの場所に戻った感じがする。

「GATE から15年、技術も進歩したので、一つ未来に対して、投資をしてみるか」というのが COARE である、という態度は、非常に気に入った。やっと Morel 達も、「日本の心境」に近付いて来たように思われる（つまり、いろいろな政治的問題にも手が打たれたのであろう。日本は、西洋から遠いので、結局、純粋というか、少し、距離があるのであろう）。

最後に、この会議で、「新しい Break Through が要る。新しいパラダイムが21世紀の道を開くために必要である。」としきりに言われていた。TOGA-COARE が、科学への投資ならば、この中から、これらの新しい Break Through が出て来るべきはずである。これからことを始めようとするにあたり、「いざ、兜の緒をしめて、心してかからねばならない。」と気分を新たにして帰国した次第である。

21世紀を担う人の活躍する場が着々と準備されている感じがする。唯、分からないのは、誰が21世紀を担うかである。若い人の積極的な参加を期待する次第である。